

学校教育への協力 ～成実小学校との継続的な交流「僕が小学校の先生ですか？」～

なんぶ幸朋苑の近隣に位置する成実小学校と、平成16年10月から継続的な交流活動を行っている。小学生との交流会、施設内探検や職場体験学習の受け入れ、小学校で行われる介護教室で介護士が「先生」となって出かける等、様々な形で交流を行っている。

鳥取県

社会福祉法人

こうほうえん

〒683-0021 鳥取県米子市石井1238 (なんぶ幸朋苑)
TEL: 0859-26-5566 FAX: 0859-26-5570

○法人設立年/昭和61年

○法人実施事業

- ①経営施設数合計: 96事業
②経営施設・事業【種別毎の数】:
特養…7、老健…3、ケアハウス…5、生活支援ハウス…4、高優賃…2、保育所…5、リハ病院…1、デイサービス…17、訪問介護…4、訪問入浴…2、訪問看護…3、訪問リハ…1、デイケア…4、ショートステイ…10、特定施設…5、福祉用具貸与…1、グループホーム…8、居宅介護支援事業…6、小規模多機能型居宅介護…3、介護予防支援事業…3、知的障害就労支援施設…1、介護予防拠点…1

○法人の理念・経営方針

【理念】

私たちは、地域に開かれた、地域に愛される、地域に信頼される「こうほうえん」を目指します

【基本方針】

私たちはサービス業のプロとして、正しい情報を伝達し、自分が受けたい保健・医療・福祉サービスの、提供・改善に努めます

○取り組みの法人での位置づけ等

法人目標「『地域との密着度』を高める仕組みの構築及び実践」の取り組みとして実施している。

○取り組みを実施している施設の概要

【施設名】

介護老人福祉施設 なんぶ幸朋苑
【施設種別及び利用定員】
特別養護老人ホーム 入居者104名
ショートステイ 16床

○活動内容

- ◇活動開始年: 平成16年10月
◇活動の対象者:
施設近隣に位置する小学校の小学生
◇活動の頻度・時間:
平成16年: 4回、17年: 6回、18年: 6回、19年: 10回、20年: 10回、21年 (8/6現在): 3回
1回あたりの時間: 30分～2時間

活動実施の背景、実施にいたった理由

当法人では、設立以来「地域に開かれた、地域に愛される、地域に信頼される」施設・サービス提供づくりを理念に掲げている。しかし、なんぶ幸朋苑では、なかなか具体的な動きとして、地域交流、地域貢献を形にすることができていなかった。

そのような中、平成16年2月に、岐阜県と愛知県の施設視察研修の機会をいただき、改めて地域交流の重要性について学んだ。翌月の法人内研修会において、「地域の方が集まる施設作り」と「施設ご利用者が出かける地域作り」の重要性について発表した。

その年の10月に、当施設の近隣に位置する成実小学校に伺い、交流活動について理解を求め、10月19日に第1回目の小学生との交流会を実施した。以来、現在に至るまで、様々な形で交流が続いている。

実施内容

(1) 交流活動

交流活動は、児童が施設ご利用者と一緒にゲーム等をする「お楽しみ会」、児童が施設を見学する「施設探検」、児童が介護士の仕事を知るための「職場体験」等、様々な活動がある。児童は小学校2年生から6年生で、人数も4～5名程度から40～50名程度まで様々であり、同じグループが数回来苑する場合もあった。

(2) エコ活動

成実小学校の父兄会で実施されている資源ごみの収集活動に、当施設として参加した。また、当施設で収集したペットボトルのキャップを、施設ご利用者と一緒に小学校に持参し、活用していただいた。

(3) 介護教室

成実小学校には、4年生から6年生の児童による「福祉委員会」があり、募金活動やお年寄りとの交流を行っている。当施設では、この委員会とも継続的な交流を続けている。年

1回、小学校で委員会の児童に対し行う「介護教室」もその1つである。

介護教室の内容は、身体に重りや色つき眼鏡をつけて擬似老人体験をする「浦島太郎」と、「車椅子体験」の2つである。この内、車椅子体験は介護士が先生となって、車椅子の使い方を教えている。

活動効果 (利用者や職員、地域などの反応、影響)

最近では、家にお年寄りがいない子供も増え、お年寄りと接する機会が減ってきている様である。その様な中、子供達にも様々な発見があり、色々な感想が聞かれた。数回訪問交流した児童にインタビューをした際、「はじめはドキドキした」と言っていた子供が、最後には「昔の遊びを教えてもらいたい。そして今の遊びを教えてあげたい。」との感想を聞かせてくれた。

また、すぐ近くにある施設なのに今まで入ったことがない児童も多く、介護用品、福祉車両等に対し、本当に驚いた様子が見受けられた。また、介護士の仕事を間近で見て、人と関わることの難しさ、大切さを感じてくれている様である。

施設ご利用者にとっては、小学生の子供たちの姿が見えるだけで、目を細めて喜ばれ、続けて来苑してくれる児童達と話はずみ、なじみの関係ができる場合もあった。

職員にとっては、小学生に教えることで、改めて自分の仕事への振り返りの機会が得られ、「先生」役が、仕事への自信ややりがいにも繋がっている様であった。

今後の課題及び展開

現在の活動を継続しながら、特に「小学生とご利用者とのなじみの関係」にポイントを置いて活動したい。当施設は大規模施設であるため、「気軽に立ち寄れる」という雰囲気からは幾分離れている。そのため「学校帰りに、あそこのあのお婆さんに会いに行ってみよう」という様な関係が広がれば、「地域に開かれた施設」に近づくのではないかと考える。

またもう一つの視点として、「施設ご利用者が出て行く地域の中に『成実小学校』がある」と言われる関係を目指したい。例えば、小学校で行わ

れる介護教室で、ご利用者にも先生を務めていただけないかと検討中である。車椅子体験等にご利用者が子供達の押す車椅子に乗り、その「乗り心地」も評価していただくなど、小学校が「行く場所」になるとともにそこに「役目」もある。その様な学校との関係作りを目指したい。

主な経費や財源及び人員等

- ・ 取り組みに係わった職員数 約80名
(職種等: 介護課長 介護係長、主任介護士 看護師、主任看護師、介護支援専門員、介護福祉士、介護士、主任相談員、相談員)

